

昭和の東南海地震体験談

氏名：中 美佐子(なか・みさこ)
生年月日：昭和11年3月10日
地震を体験した場所：那智勝浦町築地
当時の家族状況：父、母、長男、次男



1)地震発生時の状況

当時小学3年生で、地震発生当日、勝浦小学校の教室で給食の後、防火訓練をしているときに、大きな揺れがあった。

当時は現在の勝浦小学校の南側に校舎があり、1,2年生は午前中で授業を終え、下校していた。先生が「中にいると危ない」とみんなを教室の外に出し、校庭の真ん中に集合させた。すると運動場で竹やりの練習をしていた上級生が駆けつけて、斜面から崩れ落ちる石をかばいながら、運動場まで誘導してくれた。町の人たちも、避難してきており、何人かの生徒は家族と再会することができた。

2)津波襲来時の状況

↓写真 左、弁天島 右奥、ライオン島



自分の身内は誰も来なかったので、運動場の端にあった上り棒のところから海岸方向を見ると、真っ黒なドロドロの津波がライオン島を乗り越えて向かってるのが見えた。それを見たとき、足がすくんでしまい「恐ろしい」の一言だった。

3)家族の行動・被害

父は酒屋を経営していたが、当日栗栖川(現在の田辺市中辺路)に法事のため、長男は大阪で大学生活、次男は佐野の巴川パルプに学徒動員で駆り出されているため不在だった。

母親は懐妊中で生み月であったが、屋前に用事で築地の棧橋に近くにあった商工会に出掛けていた。その帰り際に立ってられない程の揺れに遭い、急いで戻ろうとすると、近所のおばさんがしきりに、そばにいた孫に「井戸みてこい」と叫んでいた。何のことが意味がわからず、何とか家の中に戻って、大事なものは持ち出さないと、風呂敷に通帳や位牌を包んでいると、ガラガラと音がするので、庭から外を見ると、家の瓦礫や他の浮遊物と共に津波が押し寄せてきた。

恐ろしさのあまり裏の倉庫の二階へ走って階段をあがろうとすると、潮はすでに腰のあたり

まで上がってきた。とりあえず難を逃れることができたが、瓦礫の山が覆いかぶさり、外に出ることができなかった。長男の同級生の従兄弟が「おばさん、おばさん」と声を出しながら、家の瓦礫を掻き分け母を見つけ出しおんぶして助けてくれた。

小学校で婦人会の人たちが炊き出しをしてくれたので、ごちそうになっていると、新明町に住んでいた平野のおばさんが探しにきてくれて、母親も来ているからと一緒におばさんの家まで連れて行ってもらった。次男は不通になった鉄道の線路を歩いて佐野から帰宅するも、家は大破して中に入れず、小学校の講堂に身内の安否を尋ねたが、叶わず一晩中そこで過ごしたそうだ。

4) 集落・周囲の被害

流されてきた家の瓦礫や流出物は家(現在の南紀書房)の前の通りで、重なるように止まった。周りには異様な臭いがたちこめていた。

5) 地震・津波後の生活

平野の叔母さんの家で家族がやっかいになることになり、倒壊した自宅や近所の家屋、前の通りは3ヶ月程かけて、すべての瓦礫が撤去され、きれいに整備された。

物資には乏しかったが、身内や近所の助けを得てしのぐことが出来た。食料をまかなうために、妹を背負い、母と着物を持って、奥に農産物と物々交換に出掛けることもあった。

6) 次の災害の備え

近くの高台に避難所があるが、階段が狭いため、多数の人が押し寄せ、パニックになる恐れがある、かえって危険だと感じている。高齢のため軽快に身動きが取れないので、へたに外に飛び出さず、自宅の二階で退避していたほうが安全であると自覚している。

↓写真 避難通路



↓写真 避難所へ上がる階段



7) その他

地震が起きたらすぐ外に飛び出さない、一番近くの高い所に行くこと。何かを取りに帰らないこと。大切な物、少しの間でも、口に出来るものを持つこと。以上の事を教訓としている。